枯鄰集

全

914.5
D34z

9145D34g

帝国図書館蔵書

枯野集

朝寿吉本北川へふみて深川へ出てたづねたれいやうあかふいやをふ

毎月ちかひ蔦城山を見ばやと

ちて夫の京伯敬をかたらひ

横ゐのあるこのあるまきをみつ

大和国青柳のあたらしきをまてあるよふ

山ありてるこの山上をまくらに高間のやま

とりかをゆみ大をらふすまする

おとくなる舞あるまたこの川を海人のと

とよんでこ芳野出て書き古常をひき

帝国図書館蔵書

国立国会
25.3.31
図書館
112366

はへるかこをく序測まを屈漸いやひろふいや
長ふかの舞あられをる故山の起るとまろ川
上ようて川のうみふ入るふいたりてやまも又
尾となまりあまをまのいやま川を魂合るやや
ひらんれりのとちふをひるへきぶらしをるをも
あるか茂川ふらしはやをるふけり山川の
清きをふとはあまをを拾たりの歌集ゆきを
むつまれあのはかをたのおまい重廉児題ふ
なられをかふかをみをとをふたまひを屋
おを拾をるをまりはゆきををふ

猶本紀ふとるを舞をるを舞人の立列をふあ
まををあ舞あるをもしは山を一言をの志ます
御やまなりかを大神の居前ふ丹川もを里
をつのるやひるふをしを拾をふあを
て路をふ人

神遊ひあるとふのあふむ山をふも若のとふ
本紀かをを

櫻の辭

名神もをを拾はをを拾のををふを紀を
居本ふの大神いを二をふ比賣神とを

に八十本種をまかしめき皇國のもろもろひとを
とかしめわきてまたまたうゑしたまひしめ
たまふ愛たまへるもたまるもたまるもの樹もまた
大このみの御稜威ふるひすがしめたまふ
かみ北はひのもとにあえたまふ天地の間より生いつ
る千ちの木のふるひたつものの
あるこころをもて一葉の根をもてあきらかにとも
まのまをもたもたへきいてやいめしへ
韓婦このら嫁わしてこゝにいまして根をもて
和のかのうちにのとやいへめいまた日本箱
日本魂をもてまとかのまのまをもたまふ
をわのまをもたまとなりけたしこのまをは
神性淳るる花もかまそのふるめ歌さ風の真
白玉の五百箇つとひ立のまひのまを
生産鏡のをわかたまふ人ちるまへすかし
しかして八洲の國のをのきりはらふことをあも
あるかもれまをもふあえをこ己の神性をみ
かは有功神の御たまをちをひをを世ものを
人ともあるをなの葬をものを

梅の辞

拾遺集

ある人ゝ菓に菊ひて言らく白きに黄を加へ
赤ゝの称のよろひきて舟毛の弱ふ却ち折て
行ら舞いきをゝ〜ゝ踏赤きを水如ふらをと
めさひ出とあり祢の神をかゝ〜あり常据ひき
遊ふらむ於ゝをゝ中あもいひる家ゝの云舉
ふのまけて却ゝ人赤ゝきに猛きに つゝく
宮の夕ふゝ〜あの紀ゝみや備るふゝめ
ゝかゝめるあけ行のふゝる奏きかゝ志
二ゝ代の名ゝ行も多ゝ紀色れゝあもきに
あゝゝ程あ多きけゝなゝ〜て奏ふ行ゝの色

紀ゝるつゝも加多む まゝゝゝらゝのゝゝ保ひ
みゝたるいゝゝるゝゝのゝまゝるゝき扱志の花
を愛ん人ゝを丈丈ゝたゝゝ手弱女を英屋備ふ
〜ゝ色名の四方ゝ吟ゝむゝゝ志紀多の
進ゝの紀ゝをゝは や

菊地辞

七草と云ひ数へ〜志ゝの菓北ゝらひゝ
ゝ菓ふ〜あゝゝと色の七ゝ科のいゝ〜ゝ多ふ
かゝ菓ゝ多ゝ〜たる一ゝゝゝなんあゝるゝゝや
ゝ紀ゝ北ゝゝあの初時面ふ雲井ゝゝ〜ふ母

ひとつ家てうたのあきかぜ千とせをかねて
吹あ城わ〜らを除継ふりやひろふ秋津島
根の秋独ゑりをとまを長ふ今此をつに
吹ちつ吹ゑの浦あなまをふれをしろく
大澤の池水をふ多くはきもふんあけ
るをもしもの根をしを少人の住とまろやや
初ひ出ゑ舞とをきめ水ゑやを紅をあんん
天津星ふ部のををきかひゑ葉よれく住の
霜となるまてちかうれをしてかをわみたた
ゑをををふ世ふ比類あきまをの奥よはありけをあも
祈めてをを紀をふこのをも山路の露をはらふかと
たふふ家ふ部をい倚ををいをして威の沸世
やをけを祈ふあひてを見てめてらるをふる
八千とせをとも八千とを勢

松の辭

天ををを北高峯に秀たるありあをあらふ
海姑濱倚ふ連をるあを村立てる岡道をを敷
てを鹿結ひく住をいあらかよをる姿
へをををりてを馬ををゆのをく姿れをかゆふ
又かををるふ村雲初倚る中ふ大蛇のをを

112366

よゝのまとゝ伸たるかゝ也そゝ
龍の昇るかゝとゝ若ゝるゝ神をひて尊ゝ若
きを風流をゝかをゝ玉ゝ今る園の内薄も
紫のやいつゝにあれども九月にたゝもを
ゝまをふな舞あるける謡なゝ菊の末ゝの若を
ゝたゝへゝよゝらゝあもれいのまる神の種まか
しけ舞いゝきゝのもゝ招もや

竹の辞

ゝのもゝふゝ出ゝめゝもゝ松のいゝ色ふ色あらゝて
ゝゝ故者とたゝへゝ君の姿ゝ清ゝけ也故ゝ

乃ゝ高きを伸ゝる勢ふあらまれ操の直きゝ
所ゝ節ふ有ゝ世ゝかゝ世ゝ音そゝり潔
ゝ霜ふあゝ世ゝ危眼ふ寒ゝ出ゝや草ふも
たゝひをゝ本ふも出ゝ別ゝ天地の間ふ孔と
里たゝゝなゝふゝのあゝ紀伊久美竹多新美竹
ふ美刺竹ゝのゝみゝや

鶴の辞

高ゝ花低ゝ出ゝの子菊の中ふ左門も雪
拾めゝ美や備ふ伊吉源ゝなゝのゝあゝ
身ゝいゝゝゝゝゝ八天瓊の玉百敷つゝひを衣

ふ姿へるうちとて夢いとやうふてをの音舟は
宝撰毋おかりて漕わまるかことく人なの舞ある
青雲れ高くと舞廻るを思ふ天降ます
大神のみ遊まれつらかとあふこまあくのほの
秀起る浦ふ立る姿あもうは豊玉は奏れ
ふかくち舟遊まるふとあやまるわを衣まの
宝和の村浦より出くあれ村立むを越ふ出は
伴をとうひ鈴ひ風ふ久海筆を世の長人ふも
あるかふ者人のあり今雲のれ吹てやのらん
見てやあるべき昔浦島の子といへるものあり
此をの海者は神まやえ舞能ふ詩ふを
遂来ふ一とを和ふも能をも海ふの
八塩ちゆきかとふものなりあ四豆海を久方
の天は八ちまと宮かふあらをや故ふを
ふをを徳らあいのをかふ色ふ考らむ吾いまれ
をふとありあらん人のふとれをおいくらく腰ふ
十蓬貴宮ふとひいまふのをは揚ふふらん
とをいひるわをを又れふまあをあり海ふ
のをく天あるや作をとは乳少ふ越ひ月海者
うふ一就ふをとを来て系大者の海者ふわの

[illegible]

富士辞

[illegible]

七夕詞

[illegible]

わかとせあれこのはきを失ふと家を上田久保
田もちもちふかとしてあれも麻もはりてもはなれ家京
ら舞ふ程ことひ此二の星をまたるるまて
甚思歌ふあふきそ其の二はわきのもちを
祈里元屋きそる歌いまたて妹背はよふ
はしかの里そ天の川あもちまををうら貝
紅葉のもこわるいろものこのまつめるを
めるあるわきまみや備る来を憐むと
そいもあしたの母れはは天ふて
百なりといあもいもれもきを夜ふ後
まて甚わさるいるむ事ふ天の少は大
御財男を妻なも大君をあふきあ家
君との妻

雜の部へまと

神ふあるし嵐の俗雪なして内をかしく
外をまふなる物あり是なも古は英名
へき板此をふ出る口を麓上言
とへるふこのなひ保らなる後を英の
もら湯ならへとなるふ金り風流るも神
はひまる暗れの此器を見て思ふあり

抑そもそも代まさに味酒なるまの物ふたへのち
世世に墨具理とふものの始めるもの伝らく
なるものまさに高くまさに同じかまとしつ
代をへるにふるまに第代を薄くして世
ひとしくしてもまさにまるべきにあらず
今し世のまさにふかまさにかくいふ事字に寵
らほらにある賜てうつるまに葬るも

揖の座辭

石上布留の神杉ふるめ世にわ杉ふ根よ稚く
ふ造殿せるまの本にやまに狀に直く生めるふ
ふめにあふたくにとなるもにをひとるわまれる
へらくまにやまに掛まにかくに紀大唐神の皇御ふよ
深多からあらまにからにかくに沼賜ひくに品嬢を
あこのもにておわ立ぬくるまに木まにあまには美ふ
本にふ傷まにたまにてふ稚号にあもあくに葬深宮と
らに殿に沼殿ひつまに廣敷まにつる宮柱をは束と
しにふ座の伏座ふいつるまにて業の功にまぬ
まにかまに美らに樫ら男の出楯と中執とにる采
板の数に丸手舞女の手末の貢と織者まに綾杉
ふ和やこのまるまにらの菓にに端の沙米ふ功にあ

えるは世に浮寶とも作りまかせ世に在るとも
称へらるまじむ

愛児園（マナコノ）辞

名高き浦ふ中縁ある人なり
業の名高きうらの宮殿地濃き園あるか
なりてやあるまはしたやあきを極めるとひを
かくに天雲のるあの高根もあまに嶺あく
なまるあはのまけりおもてるしも杉をへも学の道
まれ宮に浪まを濃津まちなみ振るる志を帆
積大舟の船浮きるかとく泛まに捲まを年
身を積まを浦のせまを紀伊の真砂とし
なるなるさら束やをを今一路園の立ちの家
に父ぬしの清まを名に継を変遷ふいをたりかを
年のをふに置る雄あるる砂に中のをを
磨きを孫進をふまを神のはるを一浦回に
名高きあを蘭を束

桂房辞

久堅の身に桂をるはのをと大空を仰きを
彼ひ今年回名に是の本字をのるる
山人の極をを名を義を枝に一寝もあみ

みふ生ゑあれいとの塵の外ふなつのしれ
春新神のふふ香ゑ〜抑まれの末もや海若
の井ふ神ゑ備る榎ふもあらまを加茂の瑞垣
清〜某義ふもあらぬ家非や〜人ふかつらと
まとゑ〜ゑ舞ゑ仕と家絶過まを〜野ふかほりみ
ゑるゑ梅ふゑ似ゑ揚ふもかまを〜唐人ゑいふ
なる雅ふの宮ふ居るゑもかつらをるゑ〜蓮の池
ふ何ゑ神ゑも及ぶ〜きゑ家れまをや久つたの
ゑ井ゑまは〜ゑ小野の種ふやあらむかまを
照身の光ゑ〜ゑる付ふ〜吹ゑ〜ふ〜ゑ
ゑ〜〜き家の〜ゑ〜ゑふ吹揚むゑも強ゑふ
吹〜ふ舞ふゑ

詠齋記

榎井宇佐の需なり世人長学を業と
ゑとゑ〜ゑ

千早振神ゑ百八十神まを〜ゑ〜揚ゑ〜揚ゑ
ゑ〜〜數ゑ速素盞雄ゑるふゑ〜ゑ〜ゑる
世神ゑ〜〜き世業ゑふるゑふゑ八俣大蛇ゑふ
ゑ賜へるゑゑ奇〜靈霊神ゑ〜ゑなゑ〜ゑける
ゑゑ八の假殿を設ゑ酒弘ゑゑなゑ人八塩折の

酒をみちたくてあれら飲ゝ給ひ賜
ひ今まの神はのまを不敢まて論ふこと能
はす支やとのたまふかはの神なれ額の矢筈を
うちはらひ鞭うつ駒の強きをみ不進ものなし
ときこかるる利仁の常といひ物部の将軍も
したゝ不進むを恥めて八幡殿の源うまらふ
あまたの加勢ふくら敵をふ家の軍をとり
えむとおもかまてのるへ敵和やかなりとも少
女の眉引ほそ遠山霞の新海もうら敵まとえ
嵐ゝ暴風見る雲かりに吹出て なを起
ま如きをなを舞将軍の武き謀畧とあ
へきるまて猛き大神もら恐ふ誘ふ編ふめを
は甚古心得て社軍をもを乗仇をもとらめいく
や忍坂の大室を俄室をもつる宴ふて道臣の
命の功ゝ墨俣の岩屋を男軍ゝ出を遂と
なりて推根津毒の たをかり深ゝ隆て世ふ
も智深ゝ ふ家将軍ゝ皆此ゝ
ふて降られ能の嘉ふ敏彼のとら人朝敵を
霧ふ石を乗ゝ稲村崎敵の鎧夕の影ふ舟を逐
ひ佐ゝの嶮岸ゝ雷鳴峡ふ轟き中川の水

拙てを筆史掛濱ふ解ふ今是皆さきを大嫌
と取なく渡舟を爭稽とれなをる功あらすやまて
ふ甕塩播磨國むくきく山陰ちをる掘井主軍
事ふとを事をて家の弱を羅高とふ人の拵ふつて
物のをとををる咲くふ人も人わたる軍かをりす
主のふふ娶人りや叶ををや

小出文蔚ふ贈る文

人の子をわの子とくあをる人の子とて甚氏
ふ名をる継て家を仕ををるは和国つをの廣
く寛をき大代の御恵ををる山ちいををき
あるくもかくきを法制ふ八十氏人祖名
弱ることれくつをちふのつきく神業の榮ゆく
俗ふなも有をるをふ赤兄文蔚をふの拙を天
ふををひ初の聖地とこの果て此ひ小出氏の
世繼とく世家をけるい神産靈の幸魂さきは
ひ来てあをき娶ふをも有をるを廣是家ををと
ひ是を毒くく云擧をちく咲ちや直き物ふも有
加をを蘭ちや香くはき花ふを有をり此二種
ちを家見の父大人の好をて要き路ふをちなり
加を吾兄ふ幼き時をりを見心ふ深て此二てき

の宮陽一心やあらん事も社会の模範なるべき
はず世界の義務あるべきなり今所謂世間不能なるの
事は一なるも何ぞ為るの理本末の氏を存ずる
父母二親の法心ふかくひらく開る事なるべき
今日のもつぱら心なるべき今世祖母兄弟いつまつ
らんかなるべき物部氏古稽と仕まつらむ竹の道
き操を兄弟あき業の事はきあるべき物部義
古人の云ふ忠信を親いつまつる社家に
出とあるもいひなる勉むべき事の一文蔚を高氏云
云物部義とあるの榮を求めるなり

學の道不入立者子と為文

小花彼をやまあのしたから葉三春野字社源
とたいへ世世分をまはつまへへ分のわらもの
初めへ分をまもなへ分の母まもも
根をかきまを學の道不ありけるを分衣き物
時をを梓方自起をへへへ常世の香
菓を取りを来をまやを身の桂ををといまを
又百重山瀬ありをを高根の花を根を菓て
白を四方不義をを為をみまを言のやを橘分
湯津宮村を踏をへいへを勉むべり世府

もとを見ふる書をひらくの物ちらくとまをふきてを
教を心を深く苦をうまく樂を深く路をとみ
文をつらぬるをも初花のめづらしの船をいひとも
ふまをを愛たるをふまをを自らも思ひあるのわをあ
をまを世の博士と仰の山をとをを今をを今ふをを
思ふ来り見をしも初山路の岸の里ををるか
ふる根ををを一時ふをかをを二を樂四を
せを踏ゆくふ書い撰ふをを眼をを井をを
文を繁の来奥をのをを八十隈百隈を海を
を踏分ふをもあらを来ふをを文を作ふをを二

業のををを人をを愛をを常を楽の常をををを
驚くはのをの花のををを惟ふ見をを来をを
しをいを華然のををををををををを始をををを
たむ後を山ををををのををををををを芋分
ふ舟ををたけををを塩根の若所を伸をををん
あるをを去をふ人是ひをふる人の皆をを学の力
ふを分をを心のかをも利ををを酒ひを守をひ
をむ心ををををひをを薄を海をあを野の言
あやををり濤をふ思ひをを燃火のををををあの
をを人ふ船を人を犯せを自ら平をを取事を海

出羽より新庄に出る山路にて詠める

みのあらひ

いそぎ速く科戸の風吹ぬれば きぬ仕りきりきぬ

えて思へらく親と知らば若かるる手束杖力を

ぬきの結手奇かこと道もやゆ世の人

加へ若葉路を経て花ぬ遊び春ふらのれて

も世ふ立出でやよ有き道ふ入るかかと脇

なる落ち隈毎ふ繊細に省のちあるあまはも

山を離れて出来たつ山路ふ泥む程と有り扱

ふ里起せる蓮綱も手綱女の思ひ乱とみく初川の

山ふ新ふ新ふとよみ出川ふ結ぶ結ふ小草

たふまと踏分ぬ法ふ藤ひて春花ふうふ色に

出て結ふ春花彼ふ結ある紀と風流ことを勉めて

身を終る女海皆法山法ふ惑るものとなれ

なん世ふ多加ふ知る今一さきみを入て

のひくいのて心さ新るうる蓮の花をとらてを止

ふ出らさく女なと刻て宇伸の舞霧ふ出ある

排ひて色遊ふ赤と赤駒の足擢瓜衛ふ有く

はる紅の手上申ふ車ふ出ふ利公磨ふみ

ふ新く進行健男ふ出ひ有ふ紀法神愛

なかけるあれ美ふ今ふ出ふ法をうふ法を

わたし山ちかき花ふかたとほりはたゝ水ゐる岩の根
踏ならす道ふ雅僧をかゝいふ言葉もひを
ふる学ぶ道のゝなら法大のゝ世わたる道を

水の春望

春雨ゝ風流ゝる五人古人いさ
なひつまゝゝ逍遥をかまはふつまたる霞
ゝ橋あり伊豫ゝ清らふ鯉わゝいゝ源
ゝ山ふ盛りゝ今来のゝき蛍を鯉け観ふはう
ゝ月はゝき花ふゝゝゝ酒ゝ伊丹の白木を菊の
露ゝたくゝきかゝゝ淀川の鯉を鱠の林ゝきゝあり
主いゝ心きゝたる物ゝゝ大若餅をゝ古盗ゝらん
なゝゝゝ月かゝゝゝゝる保ゝふ弱女の静なまあ
きゝゝ鶯の一聲ゝ世ゝのゝゝゝたひあゝまゝ客
人も俳句扇うちならしゝ浮世わゝる雑波に
のなゝゝゝゝゝゝ磯ゝ席ゝゝ人ゝ欄ふ
雪かゝゝゝ泳ゝい身待波ふかゝる釣舟さゝのら
雪のやうなるをいのゝ弱泳ゝゝ花ゝゝ鳴く
ゝふ泳ゝゝゝ葬ゝゝゝゝゝゝ
是ゝ今ゝゝゝゝふ作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝふ作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山家郭公

青垣山も繁る岩根に遅れられひとへ匂ひたる老女の粧にたとへむかわれ中にもなまめかし時しもあれや郭公のなきそむるも夕ぐれにほゆけにくら花軒近の楢に来てやう声して声となく語ふをきこえぬ中にいふやうあはれ都にはあの声のある声字に鳴の月にかこちむかし雨の雲に思ひて宵よ明日よとまつらむものをさるかたに出たまれ恋しき人のつるとてもなき山路にしていつとかくたかみら鉾聞くもあるの部とつかやしきかしほけんいつしかの秋をまけける燈ありけて書よむをとふ夜も更にたつぬにしかなすをふるふらに人の入ぬるを見まいらす着ん清々なる人の卯の花を褐衣着て橘のかをしたるかに卯の扇ひらきて口ずさひてたてり思ひもよらなき我も誰にて相しくもたちに祝ふしかる蓬生とも世路の森にてしあやしく思ひともいふに偽ては恋ひ侍

なほしの雲路遥に聲へ来き声しる人も
あらむことあらめ

二聲まかり過ぬしつゝ出ゆくをやよやまちぬる人も呼かけ

つとめ年として暮をさまたりさたるの法云
の道一筋あるをと思ふ方かゝれもあれもれも性
性あるをのみやと書戸を初開て見出せる木
目ふ弱る有明の春新のことひあかるまきらめきて

山紅葉

松をみのと云をとはるを分へ手い二本をかきあて
いとまの程なる月をとあて園塔を紺袋のゝ面
物をちらゝをゝ枝の海をなかゝけつゝあのあれい
岩ふも尾ふもうをゝまゝ海岸ゝ出る者迄の木
立を眼ゝやゝ高嶺の鏡も交たるへく岩波

多磯女の様も物をあへ岸や立面服りのふまるを
岸ゝ今花あをれ是をふの枝秋津嶋松の秋紅光
照物ふ和鏡の姿あるを松をいつへ立へ
をを人ゝ是をうへ多ひとをひゝまゝ更ふをのつ
きを来ゝらすふかをみふ磯を照月をかの立面
服も深あえ取錦をあをあら岸を松わらふ
夕暮ちかゝなる母をふ氏法百あを村ゝを一
あをきの初ゝとるを中ゝふ来をあををを岩源
風雲雨天をうちかゝる時をあを深ふあれふ
かゝ廉の二夢をを月を岸のをるあらゝたりをを

かゝやき

冬曉

けさうゝかたのゝかるかの曙ゝたのゝ
夢さめのよきこゝゝおきぬ遠ふ小夢結ぶ
ゝ八ゝ結ぶの家きらゝ来きわゝる波ゝ
ゝ中ゝふあゝれなり閑ゝとみゝたる書の
あゝらなきゝゝ決ふかゝる心
もあゝれい決ふ神ゝみゝ祈ふゝたゝ
の紅葉ゝ霧みゝれたるもいゝふ拙ゝたる
も霜ゝ冬ふゝゝゝる夏ふ来ゝむるゝゝ

する陳のゝふも起ゝるゝゝう新みゝい消
たゝふあふゝむゝふゝ云来り霧ゝ星ふ丁ふ
ゝゝゝて祖新ゝふ異ふほゝふ紫の戸酒
くゝのけゝひゝいらゝす起ゝのゝ忍あるきのかゝる
ゝふ夢ゝふふと結の初ゝゝりみゝは老さ
らゝゝる法ふの夢ゝかゝゝふゝ仏ゝ

古戦場

夕日ゝ新くゝゝゝ旗雲ゝる分ふあひき村ゝ
と拾ゝつ尾花の中ふ塚なゝもえゝたり見なむ
昔ゝ軍の蹟ゝふゝゝなる駒をゝゝあゝうゝわゝ

はたらく抑右京世を去りていまは
保元平治のいくさ起れを初めとして大方世と
して安からぬ時なく家をみだりまぬ年なれ
ば廣き小狹き所にて宋朝伊勢の国奪ひ或はまの
かれて身を失ひあるは肝れて榮を深るたく
むさぼりやいとやかりこまき父母ふわの世かなかき
妻子ふさかり今こるかぬき芝野すてた生さ翌る
家の宝も雲おかさや欲みも風ふ累ひ霧
ふかえ鼓の音も神と驚きて天地をゆり揺結
の夢もあらしふさかひて山川をやぶるもの鏡ふ

矢軍たつとも背を鋒ふやらしと南あすい
かの驚ふを翔を弾ひゆまて家を捨ても捨ぬ
たのめる人の為かりまを尾ふ今鎧をも春秋を面
を草むを屍とふ人くくえあるも奥城ふる
も見えまを指葉かまをふなく虫のをあとひふ
なるはあるれふかきを捨ふまをさるを人
安ぬ世の民と生まを生るる強ある楽を楽てちを
まかりも心ふたらぬるをいまとはしれ
ら死ふるを何事をやあれあまれと猶ふふ
おきぬ奴ら神しかるめを世をいらかまの嫁を臣ふ

ゆふやあらし葉連て伴ふやうなるこゝろの世の世
なもあまた紙ふ結ぶ結ぶてゝ立ゝ視も消ゆてゝ
手向て葉と苔の葉と枯ふ吹くる風袖ひやゝかなり

秋日過慶寺

繪を作る為なれとも同一題を載ふ作也
なるなり

西山の落きゝむと分入ふ其絵まる岩根の
霧ふ神ぬらしてゝ立れ隈間ふ雲ほの白
神ゆるとみも紅葉ふ枝をとて雲て彼方の月ふ立
雲ふ月のゝ月ふ分のまとれ

雪いまゝ時ゝ雪ゝ降ゝ雪ふ降るほゝふ雪も人ふいとう
間ふたまへ破菴ふとて岩のゝよ為なやは
やゝ人ゝ立ゝ雪のゝ近ゝてゝ吟んと道
ともいとゝ小菴を分ゝ蔦ふまとりて
ひふもとめ庵をいつもゆきけんたゝ松根のお
ゝ雪空ふ搖ひてゝ清ゝ岩川の音聚ふひきて
たゝきも雪ゝ数霧ふなる森出るかける月をいつ
ゝ分ふゝ踏きたる雪果なくいのふ拾ゝとゝ
ゝ雪ふ向の岡の森の中ふ雪の苔ゝゝ

紀道ふて仏縁ふあつる必ちて急きゆきて人や
相もそと夢々ふあるべと差てふるも結ふ一差果く
法師たもうをて発り彩いかあ月紀崩きて花の
松のと生義り森を破きふちふく尾花ふ咲
き出きり きる中ふ初を出のふふ出きて行る一顔に
物もて出きあを生なる源まれてあ果ふ色
るふやくくちくふり中をもきけをて立出るふやを
まち祈まき人をとをふ誰ふと省るふ人をふ
いそやかるふふを無むを意なをの住をいかる
氣跡ををを形と見るを人今て急き出るをやを

やをとよふををよくをれい祈るふて相をさをに
更ふ狗ふきくついふるふ仏縁ふ相をさをに
きをも縁て書れふをふもなきやをを志厚くも
訪きをるふなを皆色縁の源きふとれを一云皆ゆる
なり復見失てより朝夕の供物もなくいやをく
きりく敷ふを祈らきふ少を引来一尚るふふの
破義仏をくをけ者をのるきふ示なきを事なのら
魚なをを仏るをいのをふをといひあるのいのは若一
ふら年魚を殺ふ殺ふ来をたをきをうくとの先
まふ怪しきをとのるふ物のふと相をふ仏をふ童

あめもやゝあるやうに佛まゐ尾のあるとていふ
夢ふ蔵もきて大なる狐の走り出るらんあるを
省みてあるしるべ

鳴瀑の山寺ふ麻きゝふ伸きゝ一巻の記

山も静ふこもりて花きこの音ものゝきこふひき野も
もるかふもれて西ふ日ゝ山ふ自ら出る
蕉のことゝもつゆもれいむしの音を詞部ふ堂の
板まふ寒ゝきしかの神をとゝへいゝかのふ
なゝ蔵いのゝのふ紀きて法ゝ一社口を
しゝ蔵きれゝ板もきるかゝあゝ蔵ふいのゝか

世れもひのゝあ板かゝる程ふいふやう者のゝいか
ゝるをゝ意のきかめゝきゝふらんゝふいそやゝ古人柵
俤る出きゝ蔵よゝ久ゝきのあゝきゝ板なゝ宋ま
たふみわゝる和蔵の蔵ふ秋の心をかなゝ蔵り
かゝきゝ今此あきゝりゝ時者字ゝ宋ゝいゝ蔵ふ
ゝゝ出程の時ゝ山蔵ゝゝゝゝ出ふ八月の望ゝか
りゝ出あゝゝ出ふあゝて和蔵のゝる蔵ふ神
世月のゝふりありかきいめゝへの麻ゝ宋へふ
なゝふあゝ出ふ今ゝ程ゝふゝ蔵ふれて
ゝるゝ程あゝ出ゝ蔵れゝ聲のうゝるやゝ蔵之ゝ

なの宋にて長月の初めとりなるあと小倉山の
夕月夜見そなきたともあらねいおほとろろふ社
たよらめ堤いとまれ落葉のあけも早紀あらめ
と野辺の花書おみてきまるタや書こひのあも
きえ雲ふをの〜かゝむとのへもおわすを物を近く
あるのあふを深く春かゝ紀ふを心を深るお
らむあるるを宵の宮ちのきよ家をぬるい所ら
らやなといひくわらふこのるれとふ田南の法ゆ
きら来きて稲の穂あわのら白へるを比良の山を
秋霧り出くる月ら常なり今さら結やうふ蕨れ
て人〜涙ふれ月をうつ者きいをのへ結松原行く
深く昔餘里の弓張月綱引雲間よりを出ある
あな面白とあのむる時ともあきいを松原とも行く二
こ恵三聲深山初ふ〜ふをこわ〜きるふ蹄夏ふ法
くを出をこら舞やうなわり
夕やこ結深山ふれきの藤の書ふ月を空ふ
さこひ出こを
妹背とふたあら落山の寺ふ立ぬ社〜ふひある
夜なりや

雅波天神ふの記

蛾の光を星はなれくつらあれて夕波ふかしめき物
の音を吹風ふうつ来て来宮ふとあるを川を渡
るも漕ふも大舟小舟こもち隻ひていそみ重を
あまてを水もたゆふ来り是を見るふ目もまを面
くこれを吹ふ心も空あり細のあるふ事りてを云
紫ふ筆ふ書しを事や抑大宣國ふ書しを元多
なまをふまをの難波の大坂をもハ十面ふ道を
る事ふしを天のをは富ふつをる事ふり給
しを今宵参を集る大神をあの面ふして跡ふ道
を尋る法参をつへを書こをわを賜へるさまう人必新

あをあら来ふふあるを人のをらく元天の位財
を費し物を書を事年庚ふ書らひ来ふける事
いふふもいをを宵あの川をのを費し捨るをふ
ら歌をくをやをふをを貧ふをけ乏を救を
はいのをらんとふふ和の事をけらくをい貝を前
の理を論ひを廣を人大を紀物を悟らを事や
いつへをいをや大を無治を来を歌百年の久き
けふをいをふ行業をなをもつふ物ふ
石根をなく静けく安ふ久き法世の如き事は
是の空をつ日和を要ふり外國をを倫やいを

それいかなる天雲れハ重立奥まて海を白波の不
立婦る雪わふいたるまて人住里と成まて元家り
ましき年に住ふいやまさめ里かく弥増ふ物多に
出くる時ふあまりてこを費こを考を存なか
ら毎ふを深山の奥ふ米を搗ら其ならすかも成く沖
津島をふ衣を求るまたつきも先ふへ〳〵さる也是の
品庭の大湊ふ四方八方の山幸海幸ふ運ひて物
を結富をを天のおれ物ふ考をも自なる此世の
大々く廣々き此恵なるこをやこを思へも此ならふ
きるふ家の恍いハ十ふ成ふてまを雪
わをるくをの物のをを八十ふ人ふ和もる者と
社を拝ほ此ゆを拝ふあらをやこをあらをを成人ふ
をひふこをくとをふ毎をたをたまて彩ふらく
あふをやけふの法ふをやあれふこをやふれ大
法世や玉幸神の法猿蛙と出雲の神世を榮
えを此歌ら結神るをれいふ人家ふ天ふ是人り
ふふあらくり

嘉永五壬子年八月十六夜の事の
浦ふ遊ふ記

八月結望の歌山川の清き春ふて面をわる

北浦ふかく聖性雲外八月の白ひやりとふうす
きて春山のはふ共そこの海底なれしろく
して酷たちまち蓋京風流丸そよ紀て中の吉と
ひとりなり海い大空を吾て雲青波ふまろひ江
ち山陰をうかへて毎てるねをめぐる妹背は行
ふたちて、是一種の宮を立むらあとて二年の山ふ
多霧を穿ちて海吾北あらかゝ浮ひ出るふ仏ち
こちやいまへの天皇を吾て切鳴をすして吾を
ひを殺ひとりとよ人日見吾まて賜ひて嘆き[redacted]世ふ
解名をあ舞鳴ちひて浦ふ出るまふ思ふと

ち秀樹の甘酒うやらふのこ吾人破ふ々ま吾を戴ち
古へふり祝うたひて清き清の水ふひろひあるを
笛を吹らして雙立杜の秋の鶴ふ共ふあるれ
とふいつやう浦ち多きを此浦まふ存ち多きを望
の今宵ふのくあひよろこひ和樂むまを云
なくやちまちんとふ却の吾昔けら人古吾藻社
も藻ち憐て奥津漕れて源きころをのり人道
宮の四立ふ見さけて吾のうらうふ吾きこ藻を
はらねいい以宿稀なら共や紙ひ四ふの力を
千こ北彩人此浦の老ふ競ふ藻漕草あきこ集

めあへるやうにいとなむ世のうつりかはるを心いめしく
の心ふかきをこの詞上の代の言葉に及ぶをぬき珠
北黒牛潟あきれふのこうつるを紫の名ゐるき詞
潟つゝとゝいへとをもかりやさ浦のかみさやけ人の
けきは無ふあひてはまる鶴ある所民ふ一あきは玉
津島根の恩賜をいのてかいるゝへふかへきらん
波を出ての波あゝまとも身を神世の光まこそ
あゝ果
奥津波昔をこのけゝく潮の名ゐきあきこゝろを身ふ
みゝむ

竹垣氏へれゝる文

三芳野ゐ花を雪ゐ結ゐきへふ言葉り的ゐの身
を波の手里ふ思ひやゐ結とも身をもあゝの恒
ふあゝぬいををかゝふ手ゐりを神の中とを
事ゝ人言ふ潟のゝ紀世の中ゐ結ひふい有けり
結いのきとゐ紙ぬふゝ有ぬきあゝよ世をれとふ
ゝひきゝふるゐる時ゐあるいめゝへの歌ふなの見

あるを今は亡国と云つて出家ふまのひとりの如
言葉の花も学び林より白ひ滝まの春も視の海ふ
うかひ出る物ふなもあり けるに人の数もまこと志ふ
りは日刺都ようそうもち実人を思ひ寄う嘗事
神祇学人を志ぬもむるいつ者ゝ武二の稽もる節
紀うかをれ者ものとはいつあるを名をきて後よく志を
も志りつまめなる本とひあるとこと世よたあ
ものなからすあむあるまるいつ思へも天地ひろ
とうへとも海山者とひつへともを志あれひをまう
視おうつなる時を自ら此因縁をて総数るへき
神をかるをありけ者まに縁むは頃をもも
者つ能稽のをうを形ふ津のふあまりは知法
かをとをを大坂の墨ふいませり故雑波うを清き波
の言若の潤風ふたへ来る形ふあるけるほせふ
同ふ出る雷ふ塚ふ小山国建雄の石文たつるふ
とのををを文ふ廣ふ物せをと有けりをを坂も
千廣詞をいたはらふ古る慕へとも心のをかをる
へあらをを文学ふ勉めて今たふ学をされふあ
手の拾ひる者のをけて世ふをて出へをわをを
らをる人の神をを舞を世の落をも

かくるを見てうたをよみ山田氏の功をしぬびたちか
くて竹垣ゆゑの志ふかまりけるを思ひてものをまを
物ふなる舞あるをけるをたをまれまもやいのある国
塚ありけんかうたをうる程の芝をくかをり来ぬるを
をうらうひくて浦買ふ舟をまちかくうむをを舟ふこて
ちをむをるをまを狩をかをのあまり家へうらく
家をふををのうらふあ一たをををる海人多
ふをあをる芦田をををいを名波ふかをへあ
ををい浪の華ふ田をを行一をる雑波ふ屋をよあの如
いゆをめくらむあをのをとをひふををうる蕪
為わのをふをををよあをむをを一をか

蕪女塚碑

蕪女塚をやををめをいをへの風流家女ふをみ
やひをのあをふ芦ををうへ屋と自然ををらを小山田
をやをを家ぬをを浪の世ふ芦良建旋ふを猛き
将軍に習ひて芦むをを屋をを捨てきををや當
時水穂豆新田の君皇居軍の将軍とをををれ
の濃川ふを豆利の佐と戦ふを時ふ軍いをを人
をふををふを抑左中将を過ぎを猛き将軍に出
せを和歌物郎雄やを人の額を綱ふやふるをを背

小箭勇ましかりしあら末や出でしはあまたと荊蕩のこれ
出でぬこれ芳蕗のちるをぬぬる軍ぬまは楯を
碑者筆とれりをを危ぬ敵まつまるをを家建樹の
ぬぬ社稷を鎮ぬれ左中將を玉の中の八天擁とゆ
をを高家へ刀の中の出鄉とををへ川へ見をを延
元二年五月廿日の戰ぬをを平記まつを
らぬまを管要ををまをに云擧ををあをれぬ
への妻女塚風流小巷きまを奥塚を忠ぬをを
蹟をなりをを神勅玉の手月五百年ぬりを流をを今
歳弘他ををををぬ年紀年を小石文を建をを功勲
をを小やかをを年をを巷ぬぬへきを緑をりけ為
かをはをの石文常登壁石小打を破をを物邪
の續を千歳をのけを照ををむをも萬代のけをを
を年ぬを

猿馬に騎を月をるをを

ぬをらぬ牡ひをぬをぬあらひを樂をいをも養の
ぬをを人苦をいををををの何をかをををを
伊を小怨を村塚のをみをををを月を生を冥小を
小をり

匡房卿義家朝臣小物語のこと

富士のゆきてるの極なきと雪を解して蓋考くこと
芳野源きこの極なれと花の匂もせて弥増てたゝ
のき源の水清り上ふ大江の波おそへて由望僑
魂の光をそかき梓弓ふり起せる功績も世ふ輝き
けきゝ出ふ像を仰きき見きい勲負伴緒鈴佩体
緒八十伴緒の中ふ雲井の月を別を出てきれ
て猛き將軍と社い稱ふへ今き

紫式部の畫ふ

巨勢の春望ふつらゝふたてる椿は原さて深る
色もしもとあき昂と宮ゝきゝ雪もうへさるあとふく
眼かゝや光なりけり其色をしもふ形へるあの
君もや優心のけたり知ふ唐さへをかねて佛の道の
源き理さへ深らきたるへあるもあるも及ましに云ふ
考さ宋やら高ん北物かきりあ十餘り四季は
数多きい更ふもいもを雨夜ふ品定する一版きら
古今ふ歌もゝきゝ結あるもや古今や

和さふ伎の繪巻物の奥ふ記たる辭
花ふあを愛たきかきりとはいへ月ふこを何もれ
の極ともいへさる天地の自らあるけ知ふあらて
人の心をうあゝ人の見ふ悦をゝむるわさな舞

あまけるまとやとなせふ愛し白拍子男舞なせ法
類なるもあらまほしきと田樂猿樂の品もあらて今の
世ふこそ榮ゆわさをきとかたのふなる舞まける
わさ家とこそはしるもしるしとも代ふも時えた
まとそいひのある業ふわりけん今のをハ雲たに出
雲北國ある物ふ少女のはしまつる彩舞の業を
水とすしてを流来廣く種々北作を物語いて集り
節博士をつゆ物の寄ふ合せてたらひ彩ふを猿
家今見るまとく物をるわなる舞ををるされも古
野山よりとをれし善人のもえをる初めをから收

や児を拍子二面ふを傳わををくまねひ出をを
初のつらいふくさのをわをなるをさるふをの誠と
もなり奴へかをを世ふををやをを男とりの業
ふをを唐玉を袂ふ中紀て立舞ふ女のをまを
さく男の物をる家此一出をふも寄ふ出るふそれ
ふ家らうへまを敵大刀をまよとを佩を巻ら雄の
わさくふ女の物をるふりけをさるをやむふ紀
法わをのにさをらひこの法出仏の旬へる妹さくら
巻榮ゆるふ女と愛たをふるふ女をちは身花の杉
ふふをたる風流をふをを業をを同一伝傳あれ

けぬうらを霧〳〵もいと哀かゝき風流なれも愛
たきかきりい花のこゝあらきをあもれの極い月のこゝか
い書も又巧を尽〳〵を露たゝ花冥〳〵いとたれい
たゝ簀を敷の未を侍のゝを立舞神の追風も保
ひゝるこゝもゝをあもれ〳〵と愛〳〵つかゝめ侍かゝ出
つゝたゝるをいのふをこゝやゝ又なゝふ毎

歌枕

本居の翁常ふ手をふあ未ふをもたゝる物
あり故は櫛笥本字なるを〳〵れけつゝなゝを筋根
ふふをいゝを舞さを〳〵たゝをもゝ伊勢物ふ作られる
ふのゝと問ゝるふ翁のゝ〳〵ら〳〵鏡の屋箱い君ふ筋城
をもゝを弱をよゝれたゝをゝさゝい伊とゝやゝいゝり
何をはわゝをいかゝ作をかゝ〳〵をゝるなのゝと答へ
られゝをのゝをゝ名をいのふゝをゝふをゝを古物
器ふあゝ原今物世をはゝゝをあゝふをのゝをも
物ゝをゝたゝわの心をゝを作ゝ歌ゝわゝをのゝをゝる
のふゝあゝをい疎ゝゝふ名をもれふをゝをゝなを毎ゝれ
ける故を廣物をゝふを元物あゝをい名あの名あゝを
をのやゝあゝふ舞ゝをゝを見たいゝを物のゝ丸風流たる
物ゝふる名ふをゝあゝをあのねゝをゝふをゝいのゝふ事

て舞とはたらく物をひろるふりをやはせるの時ふつけていを國ふ用ふ事をまと弱をむ物をつる枝ふつのむをと於箱の思ひあられたるものをと於ら毎を於ら舞ます弱ら枝と味もんをとかるへ紀といつて箱をもあをと物をなを物をとなをまをる

讃酒辭

月をはやけく巻を事をまを物をまを何をまと言霧のいふ樹紀を字ら人雨屋ものあらひ字あるく
おを事にて是ものも天地の自の味まるる人を
巻が志き神をう愛をを酒の力英を的け

き物の心なるら青人草習ふるをを雲をを事
物をまりきらひ面を於ら物ねぬ生ほれを何
や巻く物を物をふまを絶をなるものあるふ久志
の上巻く物ある物ありまをや大已巻少巻名二
大神の恩頼もて八束昆種の味飯を一揆同り
たを麓ふ醸なせるものふ物ををる誠をやを
名を久志と巻て支とを酒と物をを巻る此
を現身世ふる巻ふ字を水種の昆ふ
ふたらひ味ひきを束て妙なを不清しきハ母
の物をるも此ふへ巻を巻をを物の巻

はるぬへ　故うまらふをやらふ時を思らしふる和
きてくをこのまるの雲かををまたまして咲遊び
あふたまて　神の市日をてらはねと消ぬへしあい
れおき藥なるかもかをまを世豊に酒ふ飲解て弱
つも舞つ武あるのとけき大世を豊年にあ
きをとほてうたを世舞かもあのひ楽むかも

菊枯宴

菊の宴ふ赤酒ふ飲てめてをのむ
酒枯をみよ塩をてて扇をにとりて壽きをを
をくはをうはふあをとうをきのえまをむ事を世花
のいろ〳〵咲き保へるものあとく身健ふ命長くれ
もをむをとい赤八たひ立をれをを匂ひあへる
あ如く氏の名清く四方ふ味をえむるをの香を
業をををるのあ如をを義あをへきあふ来て仙
人の八を毎の宴をををあらをを云春をる音少
春ひて更ふ雪我とりて春ふるほとふ経をあをを
君ををの世をを同一をのををらるを雄人の
癖とわらをわらく君をの世をを

黒田美莊記

あのを美つ事大雅箱の筆の法一ひらを浮をの

そも看花素月把酒掬月といふ一行の辭なりけりやや
現身の世の中に愛たしとおもふる器をの面白きに
く糸竹の聲を聞くと歌をる會をのら百種の種
限なく九州をこをの日を重ね身を強る時をその
甘美を味を味も口に入なつく面白と味を色も
耳に加はるく来て先とを一巻も目に移らし
からをして又をの求るなを者をきと有くいや
しをいをを人をに人に情癖ある中に日益
をいをを夜の九夜を徒て見事きをの花
と月とに助をを情ををを紫をも

のをうに水種の豊法酒に入なを者あるをけるかを
い花を看月を美をを酒うたけ世を事をを天地
の中に樂き拾ををいへ今後に入に硯の海
をの赤を臺の黒田のなを面をを迫をを栄栄
る月に久を樂に春を紅をいをををら言の
の筆を望をを赤渡を野山に生をすをひいをを
をを入からを舞を志のをを府東に向い南に
面ある國に有後を身を山のを に匂い初
をを夜ををの影を離をを花を称に加に
る大来に生をを何をを生をかり光いををら

雪山なりて春ごとに花ちるたびに小路を掃ひ立て神をまつる更ふいつくしまあらまほしき所なるを抑此園いつの四十餘年ぜんの年伊勢のひらかまを加まふうつ是見ゆゆつりてあるも宮まらさりける所なりかの遊びぞ所とも家ぬるといのなる興ふかあるを楽むあれ時移り物のもるを主まりてさらねば苔を素をかを枝をいのをえ月を枝をへて巷やけ所なる思へをを人樂を此園の常なるあるを月をそ興たのへぬまらう人とはいつへれかをかを

翁の筆の跡のかの物とありぬるも此園を游覧きをるをやと更ふ枝をなる春ひくのもみをあら春人をもをほりをそのをを石ふ思りを所をを月をうをる為きをらかけと呼て安時代の楽き海宮をんとたまををあをかいををを園をもうつをを春をもまらう人をうををん少

拾遺集

翁の葉をを歌の中山の山路の岩ふ石あを性未ふ人夜法石ををへりをれをはらうへを岩をを苔あを生ける地をを夜を生出わの生の層歌

出る玉津島ねぶのあるさとやけき岡山あるせりと
八乎ふて菅延八ひらもかるを雲形へくてをくほ
かゝて自ら池おせり天のもら振さけられて八重
の白浪濱松の出るふきより八十のうら舟天雲形
向伏神ふうかへりかゝて出るゝ里人名つるく
祈ゝ子山と咲へりいとゝも仍つゝてからぬ名ふ
あまはをいのふとをひ時しふまをてゝ乳山海ある
石とうら宮へあるとゝふまて斎し紀ゆゑあん有ける
さるゝぬを珠の夜法ゝるゝるゝ結むし倉あるやこの下
ふ出山の摧ゝ数ふをゝるゝ事忽止ゝ云来りて
今も祭ゝ有とゝへり抑ゝゝを神のゝを浦
乃神の出を潟ねゝ経岩穂ゝら雲ありて書き強
ゝ那ゝ来りいゝゝや中山ゝる歌法石今を野歌法
せはゝをゝるゝけや添て中ゝあふ来ゝたの岩穂ふ
祈ゝゝ山

玉泉院法山井記

震旦前ゝ処玉泉山い誘庵をゝち寺ゝあゝみ
種ゝの廟ゝ今ゝの光ゝ仰ゝ雷ふゝて三蔵ゝ山とも
峰乘ゝ也智者大師のいゝき法の力をて法く明
き雲と等ゝ又出山ゝ園菩薩の善霊ゝ出ゝて

山のまとりを在りるを大海の波光ふ那まを出て歩かり
やく寺るさへ遠しと為ん舞かをり傳へける今此蹴を
玉泉とも名つけ侍りこの侍山の栄えたき御ふをり
けるなりてふ知見大海名い実浴世寺ふ泉為る
立なりきてあらたふ玉蹴とのをむとて乾ける土
の書きとう玉湯へるふいたりひをとふ及ひ姫て
底清きを清水を為舞浮られくるを形ある法の
警喻をかふひくいとく栄えたき功ありける
はらく大海のかを思きて本ことを推量るより彼
山の蛇庵を玉基き衆生恩のこ為を洗そこん
悲願ふを為あら栄かをいを舞を弾て法心とよ
を舞を心の浮ふ因縁を開菩薩大海ふ戒を持ひ
付願法心易念求愛戒品と云へ玉一句ふ為を
るるの今伊良世を清水を法を舞をろこと為の
玉泉と栄玉御を己り心ふ入へ玉ん大のたの
清水とふ思ひ玉ん

義鶴記

或人の語ならく本の国国といふ玉れ序ほとり
伊栄の為玉とまろあ玉を山のうき巖ふ鶴の巣と
くみく卵うみを玉ふかなき若の蛾よ家鶴の

卵と取かへ知きてこゝにあれば母鳥をもとりて首
ゝ葬時にのりて生きて出るを不審暗まして有
を雌雄とも不いまゝ驚紀て歸ると限あかく
て雌雄ともに伊賀とも加ゝ嘉ゝ不出
何まて生成ある人ゝいとあまゝ伴ひきゝ此友有
も家暗のゝ有ゝて なゝ事いと然ゝ々なりかゝる
程不雌雄い今ゝと心や姿あけ葬一ッは蒙不解れ
一ッを沿小蹄まて死ゝるとゝ形母ゝ語をけるいとや者
を今も種ゝ珍き物語ゝもはゝを動きとかゝる俗ゝを
類ゝゝなゝ葬ある抑儒の道を学ひ佛の門ゝの是
何ゝを傷魂とゝひ譚ゝたゝひ天ゝゝ不滿ゝたる
中に出ゝとに名利の外ゝ動ゝ是身を捨ゝるの
いゝてはゝかある人ゝゝも者のあるゝ相続とゝて
かゝる俗を有かゝとゝもゝたゝの葬事ゝゝゝかく
世不出ゝある事ゝあゝゝ空ゝゝ人一ゝゝ打
なゝ葬事いゝゝ口をゝ出ゝれい是ゝ石文を
も造ゝゝ事ゝゝ不記ゝ世不著ゝゝ名を新
しゝの世ゝゝも云俗人なゝ葬ゝを此雌雄の冥福の
ゝゝゝ是ゝる人ゝゝ人是不感ゝて善良雄ゝを
奮起ゝ人ゝ教ゝゝなりぬゝ今ゝたゝ手廣ゝ心

はの里に手向かまと生物をたくゝ弘
人をして香ふを志のそなあらまやと大聖の生云の
宝へまるこのもよ世に人の千代と壽く蓋国豆のう
ゆ一生子をいつきゆふ里ひとめてう家暗の數ふも
あらぬ初ますきゝ子にとをこの〳〵松を事結恨ふ
たへ生玉極名を捨〳〵生をたる日本魂動なき蓋
良健雄も志く海き猛きを名を久方の天ふを
きゝえうつをみに世をもに初きを世八千世語継
ぬ〳〵人をあえなす舞
千世ふへきを名を捨〳〵蓋国豆の名を美世ふか

たをつの舞

神かも理

山国ふたてる神名を井引を世ふあつあるを
云ふをのなの沙神久延毘古ふ弱ひくゝらく汝
久延彦わる見をや朝を横雲に棚引をまをす夕い
星のかゝやくまを久方に天を仰きあら金の地に
ふ一水流よひも花を星をあふをみ大に財のあふい
をゝこと仕つるをいとをたを一海久延彦をえるに
笠あをいあふをとも夢ならに義あをい風吹を
をさ物のらす幸雄さひゝを矢を見れを物ふ

むのひとく故なる事なし法あるもと杉本のひと
を功わまを不達へるもとく川冠なるを汝久延彦
わの奴不あらをわまを井引海の君たらさるいふ
とふ久延彦答へらく云ふ鳴然なり然るあ
まといまとふのき理なをとらをこはこなを玉津神
の任なの故海の開しきもわの静なるも名もく
国とる所美なまを伊加雄きまをいもむ海わを
置りを杉末とふくと結をなをを一なる村を海を亦
杉末ならをやまをいまを一か暇なを紀を身北暇あきを
しを心よいとなあを和の暇あるを身北暇あるをて
伝結いとまを一いのみといもを吾久延彦の問る事を
一歩水種の豊古国の河守を一を夜の守日のもと
四方を守らひよ神くをのを国裏廣物裏の狭をの城
裏の一ひ神くをの毛の美物毛の和物をやらひ日
をひ根をまを根をよすからあのら果もせをもらひ花
るを海の功とをとをとやを異ふら森坂天のかの事
をを重をとを大神を廣給くるををらをやとくも
井引理ふかをかけらをうを形くく

夢幸翁ふ贈る文

嘻廉を夢合のまをふを古結語云ふを名吾の

かゝらぬ世のうらみとなりぬ今は世の譏あるをなげき夢
もまゝもあるまじきなげかはしあまたゝび堀の久しき付
西園寺の事起る例かからぬ事なし
ある時は紙子倉ものの落ちて穿ちて出る熊野の猟
霧をもらひ綿を少地に頸ふまつりて佐保の村
面ふるはけるをあまたゝびなげきあまたゝびなげかしめ夢に感ぜ一向
ふ物をたのまんまゝ石根まもるものから出る
此片葉も言ふ甲をすべき夢も感もまゝして形ふ
をあまた物を流すまゝして己ふ人を磨くなんまふ
るべきまゝふ篇あり翁ふ〳〵ら〳〵現身の世ふあ
る人樂を深めゝ歌をまゝふるあゝ絶をあまたゝ乗
てふ事限なけまは一くきの形をかゝひ深をまた
は又一くまた形をまゝ起をまゝ出まゝふの繩習を
けまば黄金夢をあるまゝ白玉あるまゝも
人をふものゝ樂を絶めやゝを強て求まむふい
中ふ憂を桂ふて樂の基ふあらすまゝ
家一四ふ樂あり松ふうつゝ身の形をなるゝぬ
をまの夢なり世愛よまきて深へきなるねと
自ら思ふをふまゝ時もあまゝなるを山川に
逍遥あるまゝ芸藤ふ酒りまゝるなとゝの樂

堅へむとのみかしいとなきの木の枝といへども現
の時とても何をかのの遠ちあらむあきさく花の
雲の春も小蝶の袖のふるさめやさく女郎花の艶
く秋も露飯かゝほとゝぎすかなきの里へとゝ雲
もすゑ現身の樂をなるまてさ果て磐なきの夢社
樂の極みを有きといへりのあきさを紙をて実の
言葉きらく耳小雲きて目にえへ物を風の音小
り目小えをよとらきを思い春の桂をり春なも
きく形をもえをもとらきて沿まるものい夢小
なんありなるかて風と春とはやをく春なる物小

しかきと求めて清へきとるかしく吹ふのすは墨り
宮なれをを夢と同じ今風を春とを巻て赤舞ま
夢をを形とかをの少ををらん古の海人い己ろをの
から音なきを今れ箱を己ろ夢ををてたのしむ
箱の和夢をたのしまち揮麻の幽すもなく名
吉社頃の恋もあらし箱を松可美夢幸箱とたゝ
へむ今西のち弥継ふうやしゆ夢をゆ果ゆるりせ
よ吾まをう海ら小夢をの夢をゆをのを

然野本宮神主玉置を吉ぬへる文

林を曲きるも吉をを吉く伝深く川を渡きるを義

今て流廣ー大々き功を成さきのちかあらはさやけき服事如事あさはらの程心大けきい濁のせいとはさてしさ正廣さ立よろつ心捷きさ曲きるをふくみて正源きを省きを見物のつのら結勢かめまに玉劍玉金箱もや宮柱さしきさ立ー功をたくいさて弥廣く弥源く今程さ信すよりさ源をくむ人いとさきなり然さあきとさ母と執りへるさふつきさい曲きるさと論ひ濁きりと見る人の物いひまぬのきたきるとも少からすやあらむ但世箱の形儀も言葉も嚴めのあらひさ見人々れと底津磐根の底心い生きを小朝の奴傳魂清き変おむ有るそい交源のらぬ人さしらさやさけん今世箱のるー狀を志らんとあらさ

若然の出のる山の奥されを神世わきを取る名

そかをれる

かくいふさ苦ふ進さ苦ふ退ー巻の友藤原千廣今い自得居士とふ世捨人なり

壽屋詞

いてや吉人ゆ北習とーて古字論ひ人ゆ論ひ物とあゆ法らふる字好さて有かとある者世なくひ疎

ふつゝなるもあるべきあらひ俗なるは少く成る
ものゝ多し然るに世俗の世ゝなるいのみといへども
久敷修業するものもあらず行ひこゝろ程ふるの
へるものもあらず玉の疵あるまはゆるもいまだ見れ
ども全きたぐひ滑らかなる玉重用しく眼ふるへく
ものしてひらけたりなりぬるまゝ
たゞ神性とやいはむあるべき歟正しき傷心をいたん
まことに吾兄光道主家の名を高らむ作ふ俗業の
師匠なれば名代なりやや新玉の事ばかりたまり
俗稼ある時政行き種ゝ告諭して民を導物の所

世ゝあるべきものを作きて世俗穢惡を畏ゝ玉も
らふ世ゝ世俗惡を嫌ものゝ祝きふ俗きまゝ
俗きまゝるとあるとに真心ふかきまらは俗業る論ひ
ものゝ数かゝ俗きまゝ習もわるべきく心のゝかふ見え
たひらけく弱ある世俗惡世業ゝ世ゝの俗きまゝ
神の門ゝ人ゝ世ゝ乃ゝ和神の世ゝ乃ゝ世ゝ愛
賜ふへゝきまゝ言葉のゝ家ふのうるはしきのゝ家ふ
きゝのかゝみ曇ゝなく常ゝ世ゝ乃ゝ大世を
常盤堅磐ふ壽きまゝ世ゝ世ゝなるかゝ名
ものゝ

かゝ言葉をもてほとゝぎすを菊もよろこびぶ塩をそ
そ書るゝ不偏のひゝきをえ
こゝ世界をよく世界山ふかきをかれもをのゝら茶をを紀
雲のおと白雲ゝ有きを毎ゝ本の安達ゝ山よあき
くをは京のるゝあちをもをかを黄人金ををてゝ加ゝや市ゝ
春をを紀寒のあのきこゝろを平をを紀のををの日を紀御
代を八千世を物を黄世を物と有も偏きひとをもかき
つ星をれいををを不偏を國をれいををを偏き
天のあを星詩を腰向ををを一ゝ不豊偏を黄不
偏を黄ををはれのつゝら偏を黄のををの天不
あをひ地不ふをひを結長不榮を榮をを榮ゝ
きを天の世

屈伸論

古人のいひをくををを松はををきをゝのをを
伸をををををををををつかをををををををれ
天蟻はゝをををををををををををを松の
ゝをををををををををををををををを
ゝををををををををををををををを
ゝををををををををををををををを
ゝををををををををををををををを

小舟帆うちあげて行方の定めなきひるがへるうきて
して暴風ふきあひ塵巨浪幸雄の海に漂わふ心
せきして深谷の底ふ踊る如き失ふなくらするむ
ある能いあまと震むるを恐きて入江のくまふ
身自ら遠り踊むるをあやふくて岩のうけ道ふ
笑ふらさきを歩和いつの湊ふもてん浜廉いつの
とを投へき伸むも底むもも人の力のけち来に
して危ふ恐きて伸へき物と失ひいつを知よ塩を
して底むへきと知るもあらすも世ふ遇れしる功
勲やもたる毎度のつとも伸もあやまらぬと

そよまとたたふ風れ抑屈てふるはし形の屈む
ふてんのかむふあらすす伸てふ事もしふのる
にして形の伸るふのらたのれ倉ふい黄金白銀米
ら粟ら横山ふを横充て対るい綾ら錦ら眼かく
やく飾らひ粧ひ厨ふを鑄廣物鑄狭物員ふもち
満雙出るふを車をつとへく湾らひ傲るとを世
ふ扱ふ志もなくるふふ為ふ力もなくふ是ふ伸たり
とやいを毎度根の梅自ふをく軒もち松ふ忘すふ
しふ柴の庵ふ潜り住るとも正志天地ふたらひ
正分海山ふを元動ふをくふを是ふかみるまとや

いと奉法無きを以て皆な接ぎて藤原大臣幼児を示
ひとかしらるいてきし源の将軍是れ兄弟の有様を
屈むときは風を起し庫の若を塗まるまあと久
伸るときは雲を奮る誘の空を翔るうまとて有伸
るを屈むも人生分のことあらばやと屈まれてか
むを非とする事あるそれなすて親を捨つへ君を捨まつらを
いいと伸ての事紀るものを多このるを以て生れ岩の
孫のこと紀山海を登るかまとてなるあるこれを
を形も折節かゝることくあ来まを絶ないあらは
親をいつき君を捨まつらるすい身を捨てみんを押へ
て仕まつるへ業をふしてを親寺弱の若きをみゆく
あまてくんの形を小進むへきならねを甚屈てる狀
世臣の子は道ならさるを小の大道ふを迷ひて惑
ふしく慨を丸家ならんるをむるを絶の中の和
そわきなら蒼山行い馬車あり海ゆのい舟楫あり
世を力てるるかてのらめやを屈むへてかを滑
ぬい伸へてのひえ和小ひとあまれ孫是の大臣
もやうまらふもかを兵衛へるこのまふあはを頼朝の将
軍もやを数も伸給るこの孔を殺や世人を
うまく悟らいをうちまむ事剛のうへ小滑休一生

神いまを常家の内小無疎なるも何ぞ物の何
らあるを世を傳こと自家集一あり紀あく物思
ふを書よかくる果を見て知ひえ於のく如ふ
なるさまあらく一面あの理を

明治二十七年十一月廿七日印刷
仝
十一月三十日發行

原著者　故　和歌山士族　伊達自得

仝　伊達行藏　和歌山縣伊都郡名倉村百五十七番地

華族　陸奥宗光　東京府平民　東京府麻布区霞ヶ関二番地

原著者兼印刷者　板上清人

版權所有者

印刷兼發行者　板上清七　東京日本橋区本石町十軒店八番地